

自然談話における「モノダカラ」について

蓮沼 昭子（創価大学）

hasunuma@soka.ac.jp

1. はじめに

「モノダカラ」は形式名詞の「モノ」に接続助詞の「カラ」が続き複合辞化したものである。これと類似のものに「ノダカラ」「コトダカラ」があるが、この三つには単独の接続助詞の「カラ」には見られない、主節モダリティの制約がある。

- (1) 子どもがあまりうるさいものだから、{注意した／*注意してください／*注意しよう}。
- (2) 時間がないんだから、{*急ぎました／急いでください／急いだほうがいい／急ごう}。
- (3) あいつのことだから、また寝坊した{* ϕ ／のだろう／のかもしれない／にちがいない}。
- (4) 雨が降っているから、早めに{帰りました／帰ってくるだろう／帰りなさい／帰ろう}。

(1) の「モノダカラ」の主節には述べ立ての文が続くのが普通で、働きかけ、意志の表現が続くと不適格になる。一方、(2) の「ノダカラ」の主節は働きかけ、判断、意志の表現を要求し、述べ立ての文は不適格になる。「コトダカラ」にはいくつかの異なる用法があるが、(3) のように、「コトダカラ」が人などを表す名詞に続く場合は、主節は概言系判断のモダリティをとるのが普通で、述べ立ての文は不適格である。「カラ」は以上の三つとは対照的に、主節のモダリティの制約を受けず、(4) に示す通り、述べ立て、判断、働きかけ、意志表現のいずれも続くことができる。

以上の観察から明らかなように、「モノ・コト・ノ」が「カラ」と結びつき複合辞化すると、その接続関係は、「カラ」の場合よりも限定された関係を表すものとなり、用法が狭められていることが分かる。先行研究も参照し整理すると、四つの接続形式が主節に取り得るモダリティは、概略<表1>のような分布を示す（概言系判断の形式と「モノダカラ」の共起関係については後述）。

<表1>理由形式と主節のモダリティの共起関係

	モノダカラ	ノダカラ	コトダカラ	カラ
事実の述べ立て	○	×	×	○
概言系判断	?	○	○	○
行為要求	×	○	○	○
意志	×	○	○	○

四者の比較で取り分け興味深いのは、「モノダカラ」と「ノダカラ・コトダカラ」の主節のとりモダリティが相補的分布を示す現象である。本稿の究極の目的は、使用される接続形式によって生じる以上のような主節のモダリティ制約を手がかりに、日本語の原因・理由文を類型化し、その体系を明らかにすることである。同じ形式名詞の中で「モノ」と「ノ・コト」がカラに付いた場合に、上のような相補的分布が生じる理由はなぜか。また、こうした現象は形式名詞の「モノ・コト・ノ」の意味とどのように関連づけることが可能か。本稿の問題意識はこうしたところにあるが、その全体像の解明のための第一歩として、小論では比較的研究の少ない「モノダカラ」を取り上げる。先行研究において、「モノダカラ」は、いずれも小説やシナリオなどの創作された話しことばや作例に基づいて分析が行われているが、「モノダカラ」は話しことばでの使用が顕著であることから、本稿では自然談話データを用い、生きた話しことばにおける「モノダカラ」の使用実態やその特性を明らかにしたいと思う。

2. 先行研究

「モノダカラ」の先行研究は数えるほどしかない。少し時代を遡った研究として、永野（1952）、三尾（1958）があるが、その後、長い間研究の発展が見られなかった。佐竹（1984）の短い言及を除く

と¹、「モノダカラ」の研究が再開されたのはつい最近のことである。松田（2006）、市川（2007）、日本語記述文法研究会編（2008）、前田（2009）などがあるが、以下では、これらの研究で指摘されている「モノダカラ」および「モノデ」²の用法の特性を、手短に紹介しておきたい。

2-1 永野（1952）・三尾（1958）

永野（1952）、三尾（1958）は、「から」「ので」と比較しながら、「モノダカラ」「モノデ」の特徴について次のような指摘を行っている。

- i) 「ので」に近い意味を表すが、「から」を含んでいるだけ、「ので」よりも主観性が強い。「から」よりもやわらかく感じられるニュアンスをもつ。「ので」と「から」の中間的な表現（永野 1952）
- ii) 「ので」とほとんど同じ意味のもので、東京の話しことばでは、「ので」よりも多く使われ、特に女ことばではずっと多く使われる。話しことば的で改まったことばづかいでは退けられる（三尾 1958）
- iii) 「もんで」は「もんですから」よりいっそう「ので」に近く、さらにくだけた話しことば的な接続助詞で、ていねいさは「ので」と同等である。（三尾 1958）

2-2 松田（2006）

松田（2006）は小津安二郎監督映画の 25 作品に使用された 60 例の「ものだから」を分析し、そのうち「もの」が「(という) 状況」で言い換えられる 54 例を、1) 話者に負荷有り（言い訳等。29 例）、2) 話者に負荷無し（挨拶等。25 例）の二つの用法に分類している。次の (5) (6) がそれぞれの例である。

(5) 周吉：いやァ ゆうべは久しぶりに友達に会ったもんだから・・・（東京物語）

(6) アヤ：ちょいとそこまで来たもんだから・・・（麦秋）

(5) は「そのような状況では仕方なく」、つまり「自分の意思でやったことではない」という言い訳の表現で、「久しぶりに友達に会ったら飲むことになる」という多くの人に同意が得られるであろう知識（世界知識）を、聞き手も共有していることを話し手が前提にした用法、(6) はほとんど新たな情報が加えられていない「慣習的な用法」で、挨拶的に使われる。強い因果性を感じさせない「ものだから」の効果を利用した「操作的」用法とされている。松田によれば、「ものだから」は、個人的（個別的）意図性因子から一般的あるいは状況的因子に置き換える働きを有し、因果関係を個人に帰することを避け、より一般性の高い理由づけが求められる場面で有効に働く形式とされ、「状況中心」に捉え表現する「日本語らしさ」を有する理由表現であるとしている。

2-3 市川（2007）

市川（2007）は日本語教師用の参考書であるが、「～ものだから」について次のような特徴を挙げている。

- i) 「～ものだから」は、「ものだ」の持つ「一般的、社会的なものと照らし合わせて」という意味から「皆にも当然分かってもらえる（であろう）そういう（大変な）原因・理由で」という意味合いを含む。
- ii) 事態の程度が激しいことが理由になり、無意識に行動を起こしてしまったという意味で使われることがあるので、「つい、思わず、知らず知らずに」などの副詞が来やすい。
- iii) 後件に命令、依頼、意志表現をとれない。

2-4 日本語記述文法研究会編（2008）・前田（2009）

日本語記述文法研究会編（2008）と前田（2009）は、「もので・ものだから」を類義表現と見なし、まとめて扱っており、説明にも共通点が多いため、ここではまとめて紹介する。まず、前田（2009）

¹ 佐竹（1984）は、「もので」には、前件の理由・原因が予想外・意外・不本意・予想以上の程度のものであって、自分の責任ではないという気持ちが込められるということを指摘し、「ものだから」は「もので」よりも、前件を原因・理由として強く主張するといったニュアンスを持つとしている。

² 本稿では、いくつかの文体的変異を代表する形式として片仮名表記の「モノダカラ」「モノデ」を使用し、実際の例文で用いられた形を「もんだから」「もんで」のように、平仮名表記で示す。ただし、先行研究の紹介の際は、それぞれの研究の説明で用いられた表記に従う。

の「原因・理由」表現の類型を紹介し、その後で、「もので・ものだから」に対する二つの研究の説明をまとめて示す。

前田（2009）は、原因・理由表現を前件・後件の表す意味関係により「原因・理由」「判断根拠」「可能条件提示」の3種、後件の取りうるモダリティにより、事態系と判断系の2種に分け、以下の表のように整理している。「もので・ものだから」は、「原因・理由」を表す事態系に属するものとされ、以下のように位置づけられている。

	述べ立て		働きかけ	表出	
	1 回性過去	推し量り・ 当為			
から・ので	○	○	○	○	
ために・せいで・おかげで・ もので・ものだから	○	×	×	×	事態系
ばかりに・だけに	○	×	×	×	
からには・以上・からこそ・ のだから	×	○	○	○	判断系

二つの研究において、「もので・ものだから」の統語・意味的特徴は下記のように説明されている。

- i) 「もので・ものだから」は、話し手にとっての主観的・個人的な判断で因果関係を認定することを表す。
- ii) 主節は予想外の事態や不本意な事態であるので、多くの場合、言い訳・弁解・非難を表す。
- iii) ある事態が原因となって予想外の結果が生じたこと、したがって、自分の責任ではないという主観的な理由を表す。
- iv) 主節には、行為要求や意志・希望の表現は現われない。
- v) 「もので・ものだから」にはあまり意味の違いはない。後者には「から」が含まれているので、「もので」よりも原因・理由であることが明確に示される。

なお、前田（2009）では「もので・ものだから」の主節には、「らしい」「しそうだ」は後続可能だが、「だろう」は来ないと予想している。また、文全体が丁寧な場合は、次のように、表出や働きかけのモダリティが可能な場合もあることを指摘している。

(7) 今日は来客があるものですから、先に帰らせていただきます。

(8) 今日はもう終わりのものですから、お帰りください。

2-5 本稿の目的と分析の観点

ここでは松田（2006）以降の先行研究を検討し、本稿の目的と分析の観点を述べておきたい。

まず、「モノダカラ」による関係づけの特徴については、松田（2006）・市川（2007）と、日本語記述文法研究会編（2008）・前田（2009）では、一見、正反対であるかのような捉え方をしている。すなわち、前者は「モノダカラ」の関係づけを、「一般性の高い因果関係」と捉えているのに対し、後者は、話し手の「主観的・個人的な判断により認定された因果関係」と捉えている点である。「一般と個別」「客観と主観」という観点は、「ノデ」と「カラ」の相違をめぐるこれまでの議論でも、繰り返されてきた二分法だが、本稿では、「モノダカラ」の関係づけをめぐるこうした対立的な把握が生じる原因を探り、新たな観点から説明を試みることにしたい。

主節のモダリティ制約については、市川（2007）以降の研究で共通した見解が示されている。すなわち、主節には行為要求・意志の表現が使えず、非意図的な行動や予想外の結果を表す表現が使われるといった特徴である。一方、「ダロウ」「シソウダ」「ヨウダ」「ラシイ」など、概言系の判断形式との共起関係については、前田（2009）に若干の言及があるが、十分なデータに基づく検証は行われていないようである。本稿では、データを質・量の両面で補強し、「モノダカラ」と概言系判断形式との共起状況を観察し分析を試みたいと思う。

次節以降では創作された話しことばの用例も適宜参照しつつ、自然談話における「モノダカラ」の使用実態を観察することにするが、これと並行して、類義語の「モノデ」の使用状況についても随時触れてゆくことにしたい。

3. データと検索結果の概要

3-1 データ

本稿で使用したのは、以下の①～⑥のデータである。

- ①名大会話コーパス v.2：約 100 時間分（名大）
- ②『女性のことば・職場編』（1999）約 9 時間分（女・職）
- ③『男性のことば・職場編』（2002）約 12 時間分（男・職）
- ④『男はつらいよ』シリーズ 全シナリオ（48 本）（寅）
- ⑤KY コーパス v.1.2：90 名の日本語学習者の OPI データ：約 45 時間？（KY）
- ⑥小松左京コーパス：小説・対談・講演など（KS）

観察の中心は、母語話者の自然談話データである①～③であるが、④～⑥のデータも補助的に使用する。④～⑥は、それぞれ、映画のシナリオ、日本語学習者コーパス、小説・講演・対談のコーパスであり、母語話者の自然談話とは異なるが、雑談などの自然談話には現れない「モノダカラ」の例や、日本語学習者の使用状況を観察するために有益だと考えられるからである。

3-2 検索結果のあらまし

①～⑤のデータにおいて、本稿が対象とする「モノダカラ」の使用回数は、＜表 2＞の通りである。①の名大会話コーパスは、愛知県や岐阜県出身の話者が多いことの反映か、「モノデ」の使用回数が「モノダカラ」をはるかに上回っていたため、参考までに「もんで」の使用回数も添えておく。

＜表 2＞各コーパスにおけるモノダカラ・モノデの使用回数

コーパス	ものだから	ものですから	もんだから	もんですから	モノダカラ合計	もんで
①名大（茶漉）	1	0	54	11	66	126
②女・職	0	0	1	3	4	1
③男・職	0	2	1	6	9	3
④寅	1	6	57	35	99	15
⑤KY	0	0	0	1 注 1)	1	6 注 2)

注 1) テスターによる使用

注 2) テスターの使用 1 回、学習者の使用 5 回。学習者はすべて上級～超級の韓国語母語話者

④は東京の下町を舞台にした映画のシナリオデータであるが、①とは対照的に、「モノダカラ」の使用が「もんで」を圧倒的に上回っており、話しことばの分析に際しては、方言の違いを考慮する必要があることを示唆している。ちなみに、名大会話コーパスで「もんで」を 10 回以上使用した話者の出身地は、＜表 3＞の通りである。

＜表 3＞名大会話コーパスで「もんで」を 10 回以上使用した話者の属性

話者	年齢	出身地	もんで	モノダカラ
F107	30 代後半	愛知	21 (36)	2
F128	20 代前半	愛知	13 (15)	0
M018	20 代前半	愛知	11 (15)	0
F023	40 代後半	愛知	10 (11)	0
F097	50 代前半	岐阜	10	1

（ ）内の数字は、「だもんで」のような接続詞的用法を加えた場合の合計使用数

「もんで」の使用者は愛知や岐阜出身者が多いことが分かるが、「もんで」の多用とは対照的に、「モノダカラ」がほとんど使用されていないことから、この地方の方言では、「モノデ」が「モノダカラ」

の使用領域をカバーしている可能性が示唆される。

4. モノダカラの用法分析

初めに、本稿で扱う「モノダカラ」の対象外とした用法について説明しておく。すなわち、「モノ」が物体としての「物」を表す場合、名詞の「代用語」として使われている場合、「～モノダ」「～ヨウナ／ミタイナモノダ」の形で「本性・属性」を表している場合、「ダモノダカラ」の形で、接続詞として用いられている場合などである。実際は用法の判定が困難な場合もあるが、判定不能なものは考察の対象外とした。以下に考察の対象外とした代表的な例を挙げておく。

- (9) M034: やっぱりさ、デパートで買うものだから高いんだらうなー。(名大)【代用語】³
- (10) F071: [クッキー作りの話題] 私もそんなにあんまり作ったことないけど。でもほんとにもう単純なものだから。(名大)【本性・属性】
- (11) F098: [大学院の応用言語学講座と日本語教育講座について] 応用と日本語教育で一緒に採ってる、おんなじようなもんですから。(名大)【本性・属性】
- (12) F049: [部屋のリフォームの技術が話題] 意外と逆に経験がないと、その、あるものにどう合わせるかっていうさ、応用問題みたいなもんだから、経験がものをいう世界って感じがする。(名大)【本性・属性】
- (13) F132: [科研費の申請の話題] で、6人、あたしたちは6人で***、今年はもう6人にした。あの一、要するに理論だけじゃなかったかな訴えられない。書き方だって工夫しろったって工夫のしようがない。だもんですから、あの一、理論から実践へっていう感じで、あの一、えっと、心理学者、実験心理学者に入ってもらって、1人。で、あの、日本語の語用論の、まあ、主として、談話連結語が多くなる、まあまあ、そういう、あの、メソッド、子どもの習得過程と絡み合わせようっていうんで出したんですけどね、まだ面識もない人、頼んだの。(名大)【接続詞】

4-1 モノダカラの前件と後件の関係づけの特徴

結論を先取りして述べれば、「モノダカラ」による前件と後件の関係づけは、概ね次のような特徴づけによって捉えることが可能である。

[PモノダカラQ]の基本的関係づけ機能

Qは、事態Pに本来備わる性質から自然発生的・自動的に生じた結果、あるいは必然的に導かれる結論であるという、話し手の主体的把握に基づいた事態間の因果関係を提示する。

「モノダカラ」の用法は、前件・後件の意味により次の三つのタイプに分けられる。

Aタイプ: Pが通常のレベルとは異なる極端な事態や予想外の状況を表し、そうした事態・状況の特徴から、自動的に・必然的に発生した結果Qを述べる。自発的、ナル的、状況中心的発想に立つものである。

「アマリPモノダカラ、当然Q／ツイQテシマッタ」

Bタイプ: Qが特別な目的意識に基づく行動ではなく、Pのついでに行われた行動であることを演技的・儀礼的に述べる。例えば「ついでに寄っただけなので、どうかお構いなく」といった意味のように、聞き手の心理的負担を軽減する意図で用いられることが多い。

「タマタマ／チョットPモノダカラ、ツイデニ(チョット)Q」

Cタイプ: モノダカラの基本的関係づけに基づく中立的用法

³ (9)は、「(そのキムチは)デパートで買うキムチだから」という意味で、「もの」が「キムチ」の代用語として使用された場合と解釈できる。「モノダ」の解釈は、一義的には決められないことが多いが、この点については、北村(2001)(2005)が参考になる。北村は「モノダ文」の意味・用法を、「代用語」「解説・説明」「一般的傾向」「回想」「当為」「驚き(あきれ)」「希望」の8種に分けた上で、その意味・解釈が決定されるプロセスを、構文論・意味論・語用論の条件など、複数の要因から分析し統一的な説明を試みている。

ここで、2-5 で指摘した先行研究における「モノダカラ」の接続機能をめぐる対立的な説明に対し、本稿の立場から捉え直しを試みたい。すなわち、「因果関係を個人に帰することを避け、より一般性の高い理由づけ」(松田：2006)に使われるとされる特徴と、「話し手の主観的・個人的な判断で因果関係を認定することを表す」(前田 2009：137)とされる特徴に対する首尾一貫した説明の試みである。

まず、松田が「一般性の高い理由づけ」というのは、個人の意志のコントロールが及ばない事態間の因果関係を述べるという側面に着目した特徴づけである。一方、前田が「主観的・個人的」というのは、そうした事態間の因果関係を話し手が自らの認識・把握に基づき提示するといった側面に着目した特徴づけと言える。この二つの観点の一つに統合することが可能である。

すなわち、事態間の関係に着目すれば「モノダカラ」は、「Pがもつ性質から自然発生的・自動的に導かれるQ」という関係を表す点で、「客観的・一般的」な関係を表すと言える。一方、事態・状況が本来的にもつ性質を話し手が自らの観点から把握した上で、そこから導かれるもっともな結論を述べるという点では、話し手の主体的な把握に基づいた因果関係の提示を行うもので、これは「主観的・個人的」な関係づけと言える。つまり、先行研究に見られるやや分裂的な説明は、「モノダカラ」のもつこうした二つの側面の一方にのみ着目した結果であり、以上のように捉え直すことにより、統一的な説明が可能になるのではないかと考える。

4-2 モノダカラの用法分類とその特徴

日常的な会話で多用される「モノダカラ」の用法としては、Aタイプ(弁解型)とBタイプ(演技型)があるが、それに加え中立的なCタイプ(解説型)の用法がある。以下ではそれぞれについて例を挙げながら説明を加えることにしたい。

4-2-1 Aタイプ(弁解型)

Pが極端な事態・状況、特別な事情、予想外の事態を表す場合で、「何しろ」「あんまり」や「～テシマウ」などがよく使われる。後件では、Pの有する性質から自動的に・必然的に生じた結果が述べられる。Qには非意図的行動であることを表す「つい～てしまった」などがよく使われる。

(14) F061：うーん。その、おなかのときは健康な赤ちゃんだったけど、そのときになんかこう頭がつかえて、なんか酸素が脳に行かないような状態がつづい、長くあんまり続いちやったもんだから、あの、産まれた子どもが脳性マヒかな、になっちやって、結局その、うん、あんまり長く生きられなかったんですね。(名大)

(15) F004：[会話の録音を依頼した相手の話題]で、録らしてもらったんだけどさー、何か、頼んでるときからすごく渋ってたのね。でー、こう、やだやだやだやだ、やだとははっきり言わなかったのか、何か、うーんっていう感じで、渋い返事ばかりでー、で、私がもう、こう、あんまりしつこく言うもんだから、いやー、結局やらなきゃいけないことになりそうだから、うん、わかった、やるわとかって言って、やっつと、こう、OKしてくれて、んで、録り始めたんだけどさー、何か、録り始めたら全然しゃべらないのね。(名大)

(16) 寅：自分の実の兄貴の命日忘れる奴があるかよ。

竜：済まねえ済まねえ、何しろほら、忙しいもんだからつい俺も。(寅)

(17) F075：で、学年暦うっかりして、そんなこと、まさかそんなことになると思わないもんだから行かなかったら、家まで電話がかかってきて、授業ですって言われて。(名大)

(18) 寅：おばちゃん。どうでもいいけどさ、犬の名呼ぶようにして俺の事呼ぶなよ……

つ：ごめんよ。あの、あんまりね、親しいもんだからつい呼び捨てにしちまって。(寅)

(19) 鞠子：あの、どうしたんですか

さ：あのね、家で鞠子さんて名前の人探してたもんだから、ちょっとびっくりしちやってつ：驚いちゃった。(寅)

(20) 若菜：他の人は誰も[有給休暇を]使ってませんなんて上役がグズグズ言うもんだから頭に來てやめちやったの。(寅)

4-2-2 Bタイプ(演技型)

QがPのついで行われたもので、特別な目的や意図に基づく行動ではないことを述べる場合の用法である。重大な目的や意図がないといった意味を表す「ちょっと」などがよく使われる。松田(2006)

が、「話者に負荷なし」「慣習的」「操作的」とする用法に該当するものである。儀礼的な挨拶などで使用されるため、雑談データである名大会話コーパスには現われなかったが、映画のシナリオの『男はつらいよ』シリーズでは、頻繁に現われる用法である。

(21) 竜・つね：お帰り

寅：ちょっとその辺まで用事で来たもんだからね。どうしてるかなと思ってね。寄ったんだよ。(寅)

(22) 謙次郎：い、いえ、出張でこっち来たもんですからちょっとお寄りしただけなんです。あのう、お元気そうでなによりです。(寅)

4-2-3 Cタイプ（解説型）

Pが本来もつ性質から自動的・必然的に導かれる結果Qを述べる用法である。Aタイプの用法に近いが、Pが必ずしも極端な事態や話し手の個人的事情を表しているわけではないという点で、Aタイプとは区別される。また、話し手の弁解や言い訳の意図はなく、専門家や事情通が、専門外の人や外部者に客観的な解説を行うような場合の用法である。以下の(23)～(25)がその例で、専門家同士の対談やパネルディスカッションにおける発言で用いられたものである。

(23) 小林：「ソメイヨシノの最もきれいなところは、どこだろう」とよく聞かれます。「どこそこだ」と場所を申し上げると語弊もありますが、南の九州よりも、より寒いところのほうが、虫の病気の出る率が少ないものですから、やはり青森や北海道などでは大変にきれいに咲きますし、量も多く植えられています。ソメイヨシノを見損なった人は、これから弘前や函館に行けば、ご覧になれると思います。(KS パネルディスカッション「日本のサクラ、世界のサクラ」)

(24) 吉田：ところがヴィトゲンシュタインが、四〇年代の少し前に、思想がガラッと変るんです。結局、記号論理的なコトバではだめだ、「日常言語」といいますか、昔ながらのコトバに変えなければならない、そういうことを言うもんですから、彼の教祖としての魅力があまりにも強かったために、分析哲学者は大部分また変ったんですね。(KS 対談「論理かヒトか」)

(25) 小松：あそこはもう一つのチョイスとしては、高速水中翼船のジェットホイルなんかの船着き場を造ればいいと思う。それだと洲本まで三十分、神戸まで二十五分です。海上交通でも九十キロ、百キロ時代になっています。しかもわりと直線で行けるもんですから、湾岸道路を回ったりするよりもはるかに速いです。(KS「本音で語ろう未来社会の交通」)

「モノダカラ」と「カラ」の違いを見るために、(23)の「ものですから」を「から」に変えた例を挙げておく。

(23) ' 南の九州よりも、より寒いところのほうが、虫の病気の出る率が少ないですから、やはり青森や北海道などでは大変にきれいに咲きますし、量も多く植えられています。

(23) は、P「寒いところのほうが虫の病気が出る率が少ない」という事態に備わる性質を考慮すれば、Q「青森や北海道では（ソメイヨシノが）大変きれいに咲き、量も多く植えられている」ということは、そこから自然に導かれる自明な結果だという、因果関係に対する話し手の捉え方を表している。一方、(23)'には、そうした話し手の関与は認められず、事態間の因果関係が客観的に提示されているにすぎない。

こうした両者の違いは、「モノ」の介在の有無によってもたらされていると考えられる。すなわち、「モノ」には、事態が具有する本来的特性への言及であるといった意味を添える働きがあるが、それと「カラ」が結びついた「モノダカラ」は、事態Pのもつ特性に対する話し手の認定に基づき、そこから自然に導き出される結論としてQを提示するという働きをもつことになる。(23) (23)'の間のニュアンスの相違は、こうした事情から説明可能ではないかと思われる。

Cタイプの「モノダカラ」は、その道の専門家や事情通が、事情にあまり通じていない聞き手に対し解説を行うような場合に使用されることが多い。こうした場合に「モノダカラ」が使用される理由であるが、それは事態や状況のもつ特性から自動的に導き出された結論であるという言い方をすることにより、事情に通じていない聞き手に対し、話し手の知識の優位性を誇示することなく、控え目に相手の自発的な理解を促すことが可能になるからであろう。

この点で、「モノダカラ」の対極に立つような性質をもっているのが「ノダカラ」である。「ノダカ

ラ」は、Pに対する聞き手の認識を前提に、そこから導かれる当然の判断やとるべき行動Qを聞き手も認識するよう訴える場合に用いられるが、「分かって当然」といった話し手の態度が表され、失礼で押しつけがましいニュアンスを帯びやすいものである⁴。一方「モノダカラ」は、事態の性質から自動的に導かれる結論を述べ、聞き手の自発的理解を促し共通理解に導こうとする、穏やかで協調的な話し手の態度を表しており、この点で「ノダカラ」とは対照的な性質をもつと言える⁵。

4-3 後件のモダリティ制約

先行研究の指摘の通り、「モノダカラ」の後件は述べ立ての文が用いられるのが基本である。働きかけや意志の表現を用いる場合は、以下の例のように、「と言う」「と思う」などの引用標識を付加し、述べ立て表現にしておく必要がある。

(26) 光枝：[命が長くない夫が] あんまり帰りたい帰りたいって言うもんだから、医者が好きなようににさせてやんなさいって、そう言って。(寅)

(27) 冬子：しばらく主人が出張で家を空けるものですから、親孝行しようと思って。(寅)

概言系のモダリティと共起する例の数は少ないが、次のようなものが該当する例として挙げられる。

(28) F002：[ハヶ岳山麓の客の少ないホテルの話題] 大雪が降ったもんだから、あの、みんな、敬遠しちゃったんでしょ。(名大)

(29) 林：(科学技術の進歩が) 非常に急速に進んでしまったもんだから、それからくるひずみが大きくなっているのでしょね。(KS)

(30) F002：[息子の話題。トヨタ自動車の子会社に配属され新しい企画に関わっている] それで何か芝浦の方にビルを新築して全部そこに集まるんですって。あの、今建築中で、そういうのどういうのを作ったらいいとか、そういうことにもかかわってるもんだから、何かすごく忙しいらしいのね。ああ、またこれで結婚が遠のくなあと思っちゃってるんですけど。(名大)

(28) (29) では後件に「ノダロウ」が用いられているが、後件は事実として確定している事態であり、「ノダロウ」はこうした現状をもたらした原因の推量を表している。また、(30) の「らしい」は、「推定」よりも「伝聞」に近い意味で用いられている。つまり、「モノダカラ」の後件は基本的に確定した事実の表現とは共起するが、不確定な推量表現や、働きかけや意志の表現とは共起しないと言ってよいと思われる。ちなみに、次の (31) における「でしょう」は、聞き手に認識を喚起する「確認要求」の用法であり、「推量」用法とは区別可能なものである。

(31) M027：大学院で、とにかくこれ言語学の方で、あの、日本語ができないから来ないという学生が多いので、じゃあ英語で授業をやったら来るだろうということでやったんですよ。ところが、来たのはアジアからの日本語教育やりたいというやつばかりで。全部今年は。

F098：は一。

M027：アジアの子の場合は、TOEFL 何点以上とか、ね、つけとかなきゃいけなかったんですけど、そういうの、もう、まさかそちらから来るとは思わないもんですから英語でしか出してないでしょう。英語でしか出してないのに。

F098：英語できない人たちがだったわけですか、それは？(名大)

ところで、方言の「モノデ」は、「モノダカラ」とは異なる用法をもつと見られ、名大会話コーパスの中に、依頼表現と共起している例があった。(32) がそうした例で、(32) 'は、(32) の「モノデ」を「モノダカラ」と「カラ」で置き換えたものである。

(32) F128：[愛知出身 20 代前半] もしもしお母さん。寝とった。あんね、今からね、友だちからファックスが入るもんで、留守電のままだにしといてくれる？お母さん受信のしかたわかんないでしょ。うっそ。ああああ、ファックスが来たけど真っ黒？あ、ほんと。じゃもう

⁴ 「ノダカラ」のもつこうした意味特性については、蓮沼 (2009) などを参照されたい。

⁵ 鶴田 (2005) は、「正当化」の発話を、1) 決定を正当化するもの、2) 必然的因果関係を述べるもの、3) 発話行為を行うことを正当化するもの、の 3 種類に分け、「もんで」「もんですから」「のですから」を、それぞれ、1) 穏やかな正当化、2) 「から」「ので」よりも弱い必然的因果関係、3) 「堂々系」の発話行為の正当化、といった含意をもつ発話で使用される言語形式としている。

1 回送ってもらうように言うもんで、あのそのままにしといてね。(名大)
(32)' ファックスが入る{? もんだから／から}、留守電のままだにしといてくれる? じゃもう 1 回送ってもらうように言う{*もんだから／から}、あのそのままにしといてね。

(32)' においては、「カラ」の使用はどちらの場合も自然だが、「モノダカラ」の使用は不自然で、特に意志的動詞の「言う」に続く後者の場合は、共通語では容認不可能ではないと思われる。＜表 3＞で示した通り、「モノデ」は、愛知県とその周辺出身の話者に多用されており、方言的要素の強いものである。この地方の方言の「モノデ」は、共通語の「カラ」や「ノデ」の領域をカバーする理由表現として用いられている可能性がある⁶。

5. 結果と考察

4 節での観察結果に基づき、「モノダカラ」の用法の特徴を以下にまとめておく。

- i) 「モノ」は、P という事態を実在する事態・状況として捉え、その状況が本来的に具有する性質への言及であるという意味を付け加える。
- ii) 「モノダカラ」は、Q という結果・帰結は、P が本来的にもつ性質により自動的・成り行きの・必然的に成立したものであるという、話し手の事態間の関係把握に基づく因果関係を提示する。Q に働きかけや意志表現が使えないのはそのためである。
- iii) ii) の特徴により、結果 Q は、話し手のコントロールが及ばないところで生じたものであるということが表されるため、話し手が責任逃れを行うための、言い訳・弁解を言う場合にその効果を発揮する (A タイプの用法)。
- iv) 実際は Q が意図的な行動であっても、「モノダカラ」を使用することにより、Q が P という状況から成り行きの・必然的に成立した行動であるかのように装う表現効果が生じる (B タイプの用法)。
- v) 「モノダカラ」には、「P が本来具有する性質から必然的に導かれる結論 Q」を述べるといった、客観的事態の解説の用法がある (C タイプ)。これは、「モノダカラ」の基本的関係づけを端的に反映した用法である。

概言系のモダリティ形式との共起については、まったく不可能でないにしても、数多くは観察されず、「モノダカラ」は、基本的に事実の述べ立ての表現に用いられる理由形式だと言える。使用可能なのは、「ラシイ」のような状況の存在に基づく証拠性の判断や、「ノダロウ」のような、現に存在する状況をもたらした、原因推量の用法に限られるようである。それを示す例を挙げておく。

(33) a *急に空が暗くなってきたもんだから、夕立が来る {だろう／に違いない}。

b 急に夕立がきたもんだから、みんなあわてて店に飛び込んできたのだろう。

結局、「モノダカラ」は、「事態の本来の性質から自動的に導かれる結果」を述べるという機能をその中核にもつもので、C タイプの用法は、それを端的に反映した用法である。一方、A タイプ、B タイプの用法は、「モノダカラ」が発揮するレトリカルな効果を、弁解や儀礼的挨拶といった、現実の談話場面で積極的に活用させてゆく中で発達した用法である。いずれの用法も、小さい子どもには使用されず、使用するのには社会的にかなり成熟した大人たちである。結論を相手に押しつけない形で理解を促すという「モノダカラ」のもつレトリカルな効果の運用は、日本社会・文化の中にどっぷりと身を浸し、日本的発想がいわば自動化したような段階で、初めて可能になるものなのだろう。その意味で「モノダカラ」は、日本語を母語としない外国人学習者には、言語構造の理解を越えたレベルの能力を必要とし、その習得には時間を要する理由表現ということができる。

6. おわりに

最後に今後の課題を述べ、本稿を締めくくりにしたい。

第一の課題は、「モノ・コト・ノ」が「カラ」と結びついて複合辞化した場合、主節のモダリティに

⁶ 山田 (2007) は、美濃方言で多用される原因・理由表現の「モンデ」の主節に、意志・働きかけ・推量表現が来る場合の許容度について、岐阜大学の学生 25 名の内省判断を調査している。その結果、方言としてはいずれも許容されやすい傾向にあるが、推量の「やろう」は、前の二つよりも相対的に許容度が落ちることを指摘している (不自然と判断した数: 意志 4 名、働きかけ 2 名、推量 9 名)。一方、同じ学生に共通語の「星が出ているもので、明日はいい天気だろう」という文に対する判断を聞いたところ、23 名が不自然と判断していることから、方言における「モンデ」の用法の広さを指摘している。

相補的分布が生じる理由の解明である。「モノ」には、外界に実在する「物」や、物事が本来的に備える性質といった意味があるが、「モノダカラ」の主節には、ナル的表現や事実の述べ立て表現が使用されるということは、こうした「モノ」のもつ意味と関連づけて説明できる可能性がある。一方、「コトダカラ」「ノダカラ」はこれとは対照的に、判断や策動といった、事実の述べ立て以外の表現を要求するが、それはなぜなのだろうか。こうした問題の解明は、今後も継続的に取り組んでゆきたい課題である。

さらに大きな課題としては、理由表現を含む接続表現全体の体系化という課題がある。書きことばや創作された話しことばに基づくこの分野の研究にはかなりの蓄積が見られるが、生きた話しことばの観察に基づく研究はこれに比べるとまだ少ない。書きことば・話しことばを含め、様々なジャンルにおける接続表現総体の記述とその体系化は、いまだ完成の段階には至っていないのである。この分野の研究を一步でも前進させるために、今後も継続的に談話における接続表現の研究に取り組んでゆきたいと思う。

参考文献

- 揚妻祐樹 (1999) 『『ような(みたいな)ものだ』『いうものだ』の表現構造—『形式』『実質』峻別への疑問、再論』佐藤武義編『語彙・語法の新研究』明治書院
- 市川保子 (2007) 『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- 北村雅則 (2001) 「モノダで終わる文—連体修飾部の時間限定性からの考察—」『名古屋大学国語国文学』88
- (2005) 「モノダ文を統一的に分析するために一意味論と語用論の二つの枠組みによる分析法の提示—」『経営研究』19巻1号(愛知学泉大学)
- 佐竹久仁子 (1984) 「もので／ものの／ものを」『日本語学』3巻10号
- 鶴田庸子 (2005) 「理由と原因と発話行為の正当化との微妙な関係: 学習者に理解しやすい記述の試み」『一橋大学留学生センター紀要』8
- 寺村秀夫 (1981) 「『モノ』と『コト』」『馬淵和夫博士退官記念国語学論文集』大修館書店
- (1992) 『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編』くろしお出版に再録)
- (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 永野 賢 (1952) 「『から』と『ので』とはどう違うか」『国語と国文学』29巻2号
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- (2008) 『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- 蓮沼昭子 (2009) 「日本語母語話者の『ノダカラ』使用の実態—名大会話コーパスをデータに—」『日本語教育連絡会議論文集』Vol.21
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 松田瑞江 (2006) 「『ものだから』の考察—日本語らしさとの関わり」『日本語用論学会 第9回大会発表論文集』第2号
- 三尾 砂 (1958) 『話しことばの文法(改訂版)』法政大学出版局(三尾砂(2003)『三尾砂著作集Ⅱ』ひつじ書房に再録)
- 山田敏弘 (2007) 「美濃方言の原因・理由表現」方言文法研究会編『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』科学研究費補助金成果報告書

用例出典(カッコ内は略号)

- ①名大会話コーパス v.2(名大): <http://tell.fl.purdue.edu/chakoshi/public.html>
- ②女性のことば・職場編(女・職)・③男性のことば・職場編(男・職)
- 現代日本語研究会編(2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房に付属のCD-ROMに所収
- ④『男はつらいよ』シリーズ 全シナリオ48本(寅)山田洋次ほか(1965-1995)日本語教育支援システム研究会『CASTEL/J CD-ROM V.1.2』1998
- ⑤KY コーパス v.1.2(KY)鎌田修・山内博之(2004)(問い合わせ先: 実践女子大学 山内博之氏 hyamauch@univ.jissen.ac.jp)
- ⑥小松左京コーパス(KS): <http://aci.soken.ac.jp/index.html>